

## 「東北うたの本」と仙台放送児童合唱団

— 戦後の児童文化育成と学校音楽教育における意義 —

"Tohoku Uta no Hon" and Sendai Broadcasting Children's Choir  
— Their Affect on Post-war Children's Culture and School Music Education —

嶋田 由美

SHIMADA Yumi

## 「東北うたの本」と仙台放送児童合唱団

— 戦後の児童文化育成と学校音楽教育における意義 —

"Tohoku Uta no Hon" and Sendai Broadcasting Children's Choir  
— Their Affect on Post-war Children's Culture and School Music Education —

嶋田 由美

SHIMADA Yumi

(和歌山大学教育学部)

戦後、仙台では戦前からの児童文化運動を受け継ぐ形で、「東北うたの本」という新しい子どもの歌を作る活動が始まった。そして仙台放送局のラジオ番組「東北うたの本」を通して東北にゆかりのある文化人による新しい曲（「春のあしおと」「なかよしの歌」など）が次々と発表され、市内各小学校推薦の児童で編成された仙台放送児童合唱団によってラジオ放送された。この「東北うたの本」の活動は、仙台を中心として活動する文化人、教育現場、そして放送局が一体となって展開されたという点で地方の児童文化育成の一つの望ましい姿と考えられる。同時に、ここで作られた何曲かが音楽科教科書教材として採用されていくこと、そして、「東北うたの本」のラジオ番組を通して流れた仙台放送児童合唱団の歌声が、その後の学校音楽教育にとってモデル的な扱いを受けるものであったと推察されることなどから、「東北うたの本」の活動は、戦後の音楽教育に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。本発表はその活動の基盤を戦前の「おてんとさん社」の活動に探りつつ、このように学校教育を巻き込んだ「東北うたの本」の活動の過程を明らかにし、戦後の音楽教育におけるその意義を考察するものである。

キーワード：「東北うたの本」 仙台放送児童合唱団 児童文化 歌唱教材 歌声 海鋒義美

### 1. はじめに

仙台にHKジュニアコーラス0.G会というアマチュアの合唱団がある。団員数こそ20名弱と少ないものの、毎年秋に行われる定期演奏会は2004（平成16）年10月の時点で18回を数えるまでになっている。その18回目の演奏会のプログラムで、

私たちは今から50年以上も前、NHK仙台放送児童合唱団員として「東北うたの本」という生番組で歌っていました<sup>1)</sup>。

と、自己紹介されているように、この合唱団の母体は戦後、仙台中央放送局内に組織された仙台放送児童合唱団である。終戦直後に編成された児童合唱団が時を経て再結成され、今もなお合唱活動を継続していること自体が、生涯学習の見地からも注目に値することであるが、それ以上に、この仙台放送児童合唱団の「東北うたの本」というラジオ番組を中心とする活動には、戦後の音楽教育の歴史という視点から、より大きな意義が見い出せると考えられる。即ち、「東北うたの本」という番組の製作及び放送が東北の文化人、学校教育関係者、そ

して放送局が有機的に協同して行われたという意味で、かなり大掛かりな児童文化育成の活動であり、かつ、ここから戦後の音楽科教科書の教材も提供されており、その活動が「東北」という地域だけでなく、全国的な規模で、戦後の新しい子どもの歌作りの一つの在り方を示していたのではないかと考えられるからである。同時に、仙台という土地には、戦後、文部省の研究指定校として「頭声発声の研究」を行った学校もあり、このような地域での児童合唱団による新しい子どもの歌の放送活動は、学校音楽教育の歌声作りにも少なからぬ作用を及ぼすと推察されるからでもある。

このような問題意識から、本研究では、「東北うたの本」の活動の成立過程を分析し、活動内容の詳細を検討することを通して、この活動が戦後の音楽教育にもたらした歴史的な意義を明らかにすることを試みる。

### 2. 戦前の仙台における児童文化活動

仙台放送児童合唱団は1946（昭和21）年初頭に組織され、ラジオ番組に出演すると同時に、後に「東北

うたの本」と呼ばれるようになる新しい子どもの歌作りも本格化されるが、本論に入る前に少し、戦前からの仙台の児童文化、合唱教育について、さらにはラジオを通じた学校放送番組について考察しておく必要性がある。

大正期童謡運動が開始されたのにやや遅れて、仙台では1921（大正10）年頃から「おてんとさん社」という同人社を中心として、東北の子どもの文化を考える運動が開始された。その主導的な立場にいたのは天江富弥とスズキヘキ、そして刈田仁<sup>2)</sup>らであった。しかし、仙台を活動の場とする天江やスズキ達の他に、野口雨情、山村暮鳥、竹久夢二、三木露風なども同人の協力者として名を連ねていたようであり、かつ、「おてんとさん社」の発足時には、野口雨情作詞、本居長世作曲の「おてんとさんの唄」が作られていたこともあり<sup>3)</sup>、このような人々との繋がりが、戦後、浜田広介、草川信、弘田龍太郎、佐々木すぐるといった童謡作家や童謡の作曲家を巻き込んだ「東北うたの本」の活動の素地を作っていたと考えられる。

「おてんとさん社」が発刊した『おてんとさん』という雑誌自体は通巻7号ですぐに休刊を迎えてしまうが、スズキヘキらの活動が引き継がれて、1923（大正12）年には宮城県図書館内に、後の「東北うたの本」の新しい子どもの歌作りの母体になったと考えられる「仙台児童倶楽部」が設立された<sup>4)</sup>。

一方、仙台の放送文化に目を転じると、刈田仁の履歴に、大正十四年、黒川郡吉岡小学校の教員として在勤、鳩眠草舎と号して大いに童心をかきたて、土の生活の豊かさに詩情を燃焼させた。伊藤博、安部宏規を扶けて仙台市上杉山小学校より児童文学誌『にじ』を月刊し、それが母体となって、昭和三年仙台にNHKが開局するや、折柴山人と号して放送台本を書き児童放送を開拓した<sup>5)</sup>。

とあるところから、「おてんとさん社」同人で小学校教員の経験がある刈田が仙台放送局開局当初から児童向け番組の放送に関わっていたことが明らかである。また、遠藤実<sup>6)</sup>は著書『仙台児童文化史』の中で、先述

の「仙台児童倶楽部」をはじめとする様々なグループが、童謡や童話のジャンルで戦前のラジオ放送に出演した事例を紹介しているが、その中で、

一等大きな活躍を示した児童放送団は、開局間もなくつくられた〈HK子供会〉で、放送局にもっとも近いところにある上杉山小学校の子どもたちを中心にしてでした。このHK子供会の誕生には、上杉山小学校の教師たち、中でも特に体育指導員として文部省から派遣されて来た中沢兵吾が大きな力を発揮したようです<sup>6)</sup>。

と、文部省から派遣された教師が中心となって子供会を組織し、放送に関わっていたことも明らかにしている。即ち、このように仙台においては戦前から小学校と放送局が一体となった児童文化への取り組みの体制が整えられていたのである。

一方、学校における音楽活動に目を向けてみると、仙台という土地は戦前から合唱活動が盛んで、児童唱歌コンクールには表1)のように仙台市内の小学校が毎年、最優秀校として名を連ねていた。当時はコンクール参加校数も少なく、また参加校も放送局がある都市の小学校に限られていたとはいえ、仙台市内の何校かが毎年、交替に最優秀校に選ばれていることに、仙台という地域全体で合唱教育が熱心に展開されていた様子が窺われる。

このように、児童文化を創造しようと同人誌を創刊した天江富弥やスズキヘキらの活動の上に、刈田仁らを中心とするラジオ放送における児童文化の発信、そこに積極的に関与していこうとする市内小学校の教員、そして戦前から続く合唱王国としての伝統という諸要素が、終戦直後からの仙台独自の子どもを対象としたラジオ音楽番組の製作を可能にしていく素地となっていたと考えられる。

### 3. 「仙台児童クラブ」を母体とした新しい子どもの歌作りの開始

戦後の混乱の中で、1945（昭和20）年の暮頃には、「仙

表1) 児童唱歌コンクール最優秀校一覧（日本教育音楽協会主催）

| 年度   | 回数 | 最優秀校            |                 | 参加校数 |
|------|----|-----------------|-----------------|------|
|      |    | 男               | 女               |      |
| 昭和7年 | 1  | 東京都杉並第一尋常高等小学校  | 宮城県仙台市東二番丁尋常小学校 | 145  |
| 8年   | 2  | 東京都目黒区碑尋常高等小学校  | 宮城県仙台市東二番丁尋常小学校 | 90   |
| 9年   | 3  | 東京都目黒区碑尋常高等小学校  | 宮城県仙台市南材木町尋常小学校 | 111  |
| 10年  | 4  | 熊本県熊本市碩台尋常高等小学校 | 宮城県仙台市南材木町尋常小学校 | 188  |
| 11年  | 5  | 東京都目黒区碑尋常高等小学校  | 宮城県仙台市南材木町尋常小学校 | 221  |
| 12年  | 6  | 熊本県熊本市碩台尋常高等小学校 | 熊本県熊本市碩台尋常高等小学校 | 254  |
| 13年  | 7  | 宮城県仙台市南材木町尋常小学校 | 熊本県熊本市碩台尋常高等小学校 | 335  |
| 14年  | 8  | 愛媛県師範附属小学校      | 宮城県仙台市南材木町尋常小学校 | 390  |
| 15年  | 9  | 東京都渋谷区大和田尋常小学校  |                 | 不明   |
| 16年  | 10 | 宮城県仙台市立町国民学校    |                 | 不明   |

（日本コロムビア株式会社『NHK全国学校音楽コンクール 音で綴るコンクールの歴史』1984（昭和59）年より作成）

台児童クラブ」の再開の話が進んでいたようであり、1946(昭和21)年3月には正式に仙台児童クラブ復活の準備会が発足し、ただちに童話童謡の会が催された<sup>7)</sup>。ただし、発足の時期に関しては関係者によって若干の時期的な誤差があり、富田博は、

終戦直後の昭和20年12月、子どものために新しい児童文化運動をはじめようと、天江富弥さんが呼びかけて、さっそく「仙台児童クラブ」が復活再開した。その手はじめが、新しい良い子どもの歌を作ろうということであった<sup>8)</sup>。

と記している。この富田の記述からも、「仙台児童クラブ」の再開当初から、新しい子どもの歌作りがクラブの活動の中核に据えられていたことが明らかである。富田は続けてこの「仙台児童クラブ」のメンバーについて、

作詩はクラブ員のスズキヘキさんと永野為武さん。それに私も加えてもらった。作曲はやはりクラブ員で、放送管弦楽団の指揮をしていた佐藤長助さんと、同じくNHKで活躍しておられた福井文彦、海鋒義美の両先生。電波を流すのが、やはりクラブ員で当時放送課長の茂木徳郎さん。天江おんちゃんの提唱がさっそく実をむすんで、誕生したのが「東北うたのほん」である<sup>9)</sup>。

というように、戦前からの「おてんとさん社」の同人達の他に、仙台の放送局や音楽界に関わっていた人々の名前を挙げている。先項において考察した戦前の仙台における児童文化活動の基盤の上に、終戦後、数ヶ月という短い期間で、子どもの新しい歌作りの活動が開始されることになったと言えよう。そしてこのメンバーによって新しく作られた歌こそが、「東北うたの本」というラジオ音楽番組で放送された数多くの子どもの歌であった。

富田は、この「東北うたの本」の歌作りの開始期の状況について、別の記述の中で、

仙台児童クラブが、敗戦後の子どもたちに心の糧としての良い文化財を与えようとして、NHKといっしょに子供会活動や、新しい子どもの歌づくりを始めたとき、先生(刈田仁)とスズキヘキさん、永野為武さんに私の四人が、童謡一篇ずつを持ち寄り、「東北うたのほん」として発表したのです<sup>10)</sup>。

と述べ、刈田仁、スズキヘキ、永野為武、そして富田博の各自が持ち寄った一篇ずつが、最初の「東北うたの本」の詩であったとも述べている。

「仙台児童クラブ」の再開の時期や経緯については資料によって若干の誤差があるが、ここに集ったメンバーを中心として、新しい子どもの歌を作る活動が開始され、持ち寄られた詩に、福井文彦や海鋒義美らが曲を付けたものが、やがて「東北うたの本」という名称で呼ばれる一連の子どもの歌であったことは確かである。しかしながら、後述のように、これらの新しい

歌がラジオ放送によって電波に乗せられた当初は、ラジオ番組としてはまだ「東北うたの本」という名称は用いられておらず、上記のメンバーが活動の最初から「東北うたの本」という名称を用いて、子どもの歌作りをしようとしていたのかについては現在のところ定かではない。

#### 4. 仙台放送児童合唱団の誕生

上記のような「仙台児童クラブ」を母体として作られた新しい子どもの歌を、ラジオを通して放送するにあたって、仙台中央放送局では新たに仙台放送児童合唱団を組織し、この合唱団員に生演奏で歌わせて、新しい歌を次々と世に送り出していくという手法を採った。戦前から大都市圏の放送局には、児童合唱団が組織されてはいたが、この仙台放送児童合唱団の編成の特筆すべき点として、団員が仙台市内各小学校の協力のもとに各校から選出されたメンバーによって構成されていたことが挙げられる。つまり、この戦後の新しい子どもの歌を作る活動は当初から、小学校という教育現場と一体となった取り組みであったのである。戦前の仙台における児童文化活動の、文化人、教育者そして放送局が一体となった姿勢が、戦後にもなお受け継がれていたと言える。

残念ながらこれまでの調査では、合唱団編成時の詳細に関する資料が明らかにされていない。そこで本項では、この児童合唱団結成時から団員として活動していた方々へのアンケート、そして、仙台市立南材木町小学校の音楽専科教員だった当時に、合唱団の練習にも時々関与し、現在も合唱団のO.G会に指導者として関わっていらっしゃる曾我道雄氏へのインタビュー、及び書簡による聴き取りなどにより、合唱団の結成と活動の過程を検討していく。今回、アンケートにご回答下さった方々の合唱団在籍期間と在籍小学校名などは表2)に示す通りである。アンケートでは、仙台放送児童合唱団入団について、仙台放送児童合唱団での活動について、再結成された合唱団での活動について、在籍していた小学校での音楽について、という4つの項目について自由記述式でお答え頂いた。

曾我氏へのインタビューと元合唱団員の記述を総合すると、当時、仙台市音楽指導員をしていた海鋒義美<sup>11) 12)</sup>が、合唱団の組織、歌の作曲、そしてその歌の指導に中心的な役割を果たしていたようである。戦前から戦中、終戦直後を通して、仙台市音楽指導員として各校の音楽教育への指導的立場にあった海鋒の関係で、合唱団員として各小学校から数名ずつの児童を選出するという方法が採られたのではないかと考えられる。その他に、仙台中央放送局嘱託合唱団の指揮者であった福井文彦<sup>13)</sup>や、当時、宮城師範学校男子部附属小学校に在職していた内海正あたりにも、合唱団の



編成や活動方針について何らかの意見が求められていたのではないかと推察される。

合唱団員の編成は、「上学年4～6年の児童の中から、女兒（ソプラノ1・アルト1）、男児1、計3名の推薦を各小学校が依頼された。」（曾我氏の記述）ということであった。元メンバーに推薦された理由を尋ねているが、「一人で野菊を歌ったのが推薦された理由と思う」「多分歌の好きな子どもだったから」「真面目で協調性のある人が選ばれたと伺いました」「健康な点」など、理由は様々であった。曾我氏によると、「どの学年から推薦するかは各学校の判断に任されていたよう」であるが、当然ながら、「声が良い」或いは、「歌が上手である」という判断が各校でなされたの推薦であったと考えられる。また男児は4年生での推薦が多く、5年まで在籍し、「変声期を考慮して6年になるときに退団する例が多かった」（曾我氏の記述）ようであるが、これとても厳密な規則というもの

ではなかったようである。

合唱団の練習は、仙台市内の小学校を、仙台駅を中心に南北の二班に分けて行われていた。曾我氏は練習の詳細について、「児童合唱団発足時には人数が多かった。それで放送には南班と北班が交互にできるようになっていた。放送にでる班は、スタジオで海鋒先生の指導でその週に2～3回続けて練習し、なま放送本番に出演した。放送に出ない班は週1回の練習があった。」と当時を回顧して記されている。放送に出演しない週においても週1回、午後3時半から4時半にかけて練習が行われており、学校を終えてから放送局や練習校へ集い、新しい歌を練習して生放送に臨むということは、小学生にとって、身体的にもかなり大変なことではなかったかと推察される。推薦理由として「健康な点」が挙げられたのも頷かれるところである。

元メンバーの記述では、放送曲へ市電で出向き、帰りには往復の切符をもらったこと、夜の帰宅が遅くな

表2) HKジュニアコーラス0.6会メンバーの仙台放送児童合唱団在籍期間一覧

|    | 氏名    | 性別 | 出身小学校           | 入学・卒業年度           | 合唱団在籍期間            |
|----|-------|----|-----------------|-------------------|--------------------|
| 1  | 三笠朋子  | 女  | 宮城師範学校男子部附属国民学校 | S. 16. 4～S. 22. 3 | S. 20. 12～S. 22. 3 |
| 2  | 成田光子  | 女  | 仙台市立東六番丁国民学校    | S. 16. 4～S. 22. 3 | S. 20. 10～S. 22. 3 |
| 3  | 海鋒博美  | 男  | 宮城師範男子部附属小学校    | S. 17. 4～S. 23. 3 | 無記入                |
| 4  | 高久幸郎  | 男  | 宮城師範附属小学校       | S. 17. 4～S. 23. 3 | 創設時より3～4年          |
| 5  | 杉山茂   | 男  | 南小泉小学校          | S. 17. 4～S. 23. 3 | S. 20. 12～         |
| 6  | 小泉恵一  | 男  | 仙台市立連坊小路小学校     | S. 17. 4～S. 23. 3 | S. 20. 12～S. 22. 3 |
| 7  | 東岩井久  | 男  | 仙台市立榴ヶ岡小学校      | S. 17. 4～S. 23. 3 | S. 20. 12～S. 22. 3 |
| 8  | 斎藤千枝子 | 女  | 仙台市立立町小学校       | S. 18. 4～S. 24. 3 | S. 23. 6～          |
| 9  | 伊達陸子  | 女  | 仙台市立片平丁小学校      | S. 19. 4～S. 25. 3 | S. 23. 5～S. 25. 3  |
| 10 | 三浦志寿子 | 女  | 仙台市立東六番丁小学校     | S. 19. 4～S. 25. 3 | S. 24. 4～S. 28. 3* |
| 11 | 小野寺禮子 | 女  | 仙台市立八幡小学校       | S. 19. 4～S. 25. 3 | S. 24. 6～S. 39. 3* |
| 12 | 三浦徳子  | 女  | 仙台市立荒町小学校       | S. 20. 4～S. 26. 3 | S. 22. ～S. 26.     |
| 13 | 菅野浩子  | 女  | 仙台市立南材木町小学校     | S. 21. 4～S. 27. 3 | S. 24. 4～S. 27. 3  |

回答頂いたままの記述で一覧表に記入。\*印はジュニアコーラス部員としての活動期間も含む

表3) 『河北新報』ラジオ番組欄にみる「東北うたの本」(昭和23年2月～7月)

| 年月日          | 曜日 | 開始時間 | 番組タイトル  | 曲目        | 巻 | 出演者           |
|--------------|----|------|---------|-----------|---|---------------|
| S. 23. 2. 19 | 木  | 6:30 | 東北うたのほん | ぼたん雪      | 3 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 3. 4     | 木  | 6:15 | 東北うたのほん | 春三月は      | 3 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 3. 11    | 木  | 6:15 | 東北うたのほん | 〈記載なし〉    |   | 仙放児童合唱団 武田敏子他 |
| 23. 3. 18    | 木  | 6:30 | 東北うたのほん | 春が来ころ     |   | 仙放児童合唱団       |
| 23. 3. 23    | 火  | 5:10 | 〈記載なし〉  | みんな元気な私達  | 1 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 3. 25    | 木  | 6:15 | 〈記載なし〉  | 春が来ころ     |   | 仙放児童合唱団       |
| 23. 3. 28    | 日  | 2:00 | 東北童謡集   | 〈記載なし〉    |   | 仙放児童合唱団       |
| 23. 4. 1     | 木  | 6:15 | 〈記載なし〉  | 筆の花       | 4 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 5. 6     | 木  | 6:15 | 東北うたのほん | 馬の小鈴 (ママ) | 4 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 5. 13    | 木  | 6:15 | 東北うたの本  | 小馬の鈴②     | 4 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 5. 27    | 木  | 6:15 | 〈記載なし〉  | 楽しいスポーツ   | 4 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 6. 3     | 木  | 6:15 | 〈記載なし〉  | さくらんぼ     | 4 | 仙放児童合唱団       |
| 23. 6. 10    | 木  | 6:30 | 〈記載なし〉  | さくらんぼ     | 4 | 仙児唱           |
| 23. 6. 17    | 木  | 6:30 | 〈記載なし〉  | 朝露小露      | 4 | 仙児唱           |
| 23. 6. 24    | 木  | 6:15 | 〈記載なし〉  | 朝露小露      | 4 | 仙児唱           |
| 23. 7. 8     | 木  | 6:30 | 〈記載なし〉  | 朝の港 (ママ)  | 4 | 仙放児唱          |

\*開始時間は必ずしも「東北うたの本」の時間を示すものではなく、「東北うたの本」を含む複数のプログラムがまとめて同一時間帯内に記載されている場合もある。

ると曲のバスで送ってもらうこともあったことも記されている。また合唱団の演奏はピアノ伴奏ではなく、仙台放送管弦楽団のオーケストラ伴奏によって生放送されており、このようなことから、教科書配布さえままならなかったような終戦直後という時期にあって、この合唱団の活動に寄せる教育関係者や放送局の期待がいかに大きかったかが窺われる。

このようにして組織された合唱団が、仙台放送児童合唱団という名称でその歌声を初めて電波に乗せるのは、メンバーによると1946（昭和21）年2月頃のこと、最初に歌われた曲は、福井文彦作曲「みんな元気な私たち」と「うぐいす」であったようである。この点については、仙台を中心とする地方新聞である『河北新報』のラジオ番組欄を念入りに調査したが、これまでのところ合唱団の最初の放送に関する記事は見当らなかった。しかし、同年2月1日には、「5：30 仲よしクラブ、シンブン、歌唱指導『東北少国民の歌』指導福井文彦<sup>14)</sup>」というラジオ番組の記事があるので、或いは、この日が仙台放送児童合唱団の放送初日で、福井作曲「みんな元気な私たち」などが歌われたのかも知れない。

また『河北新報』によると2月中には、上記の1日の放送の他にも、10日の日曜日午前中と22日の金曜日夕方に合唱団の生演奏が放送されていた<sup>15)</sup>。

## 5. ラジオ番組「東北うたの本」と 曲集『とうほくうたのほん』

先述のように、合唱団の放送当初はまだ特定の番組名もつけられずに、主に「歌のおけいこ」の時間枠内に放送されていたようであり、放送曜日も時間帯も様々であったが、しばらくすると例えば表3)の1948（昭和23）年の約半年間にみるように、番組タイトル名も「東北うたのほん」という名称が使われ、曜日や時間帯もほぼ、確定されていったことがわかる。もっとも当時のラジオ番組欄自体がかなり大雑把なものであり、実際にはこの表以外にも、新聞紙上に記載されずに放送が行われていた回数もかなり多かったのではないかと推測される。

合唱団の放送は開始したものの、新しい子どもの歌作りが軌道に乗るまでには時間を要したと推察され、放送当初は、唱歌やわらべうたなども歌っていた。このような状況の中で、合唱団の指導者であった海鋒義美は放送のために精力的に曲作りを行っていた模様である。また、先述のように、生放送の伴奏には仙台放送管弦楽団があたっていたために、オーケストラ伴奏譜の作成という作業にもかなりの労力が割かれたと思われる。本研究にあたってアンケートにご協力頂いたメンバーの中には、この海鋒義美のご子息である海鋒博美氏もいらっしゃるが、同氏は当時のことを、「毎

週水曜日の“うたの本”放送に合わせ、父の作曲するオケ版のスコアを放送に間に合わせるために夜遅くまで母や兄弟でパート譜の写譜を手伝ったことも数多くありました。」と回顧されている。おそらくできあがったばかりの楽譜が合唱団員やオーケストラのメンバーに配られ、短時間の練習の後に本番を迎えるということの繰り返しであったと推察される。このあたりの状況に関しては、元メンバーによって、「ザラ紙に印刷された楽譜で、2～3回練習し、後は回収されました。その後、生放送でした。家で練習する事もなく耳で音をとる様に訓練させられました。」と描写されている。「(海鋒)先生が弾いて下さるピアノを聞きながら耳から覚え」、或いは「海鋒先生が一節ずつ歌ってそれを覚えていかなければなりませんでした。」というように、主に聴取法によって新しい曲が教えられたようである。従って「我々に渡されるものは楽譜ではなく、歌詞だけが書かれた一枚の紙だったことが思い出されます。」という一文にあるように、楽譜ではなく歌詞だけが配布されたことも多かったと考えられる。

一方、オーケストラのメンバーにとっては、新しい曲を短時間で練習し、生放送に臨むということには大変な緊張が伴い、元合唱団のメンバーの言葉を借りれば、ギンギンと音を立てることを避けるために「雑壇の上で直立不動」の姿勢で歌いながらも、番組出演を楽しんでいた子ども達よりも、「(オーケストラの)メンバーの方が緊張されていた様でした。」ということであった。

仙台放送児童合唱団が出演する番組のために新たに作られた子どもの歌が増えてくると、1947（昭和22）年にはこれらの曲を集めた曲集が、第1集は『東北童謡集』として、その後、第2集以降、『とうほくうたのほん』として合計5集が、仙台中央放送局から出版されるに至った。その全5集計55曲の一覧は表4)に示す通りである。

この表から、刈田仁、スズキヘキ(錫木碧)、富田博ら、戦前からの仙台の児童文化の担い手であった人々の名前と同時に、巽聖歌、草川信、弘田龍太郎などの、仙台ではなく東京を拠点として子どもの文化創造に関わっていた人々の名前も見い出せる。

曲のタイトルからは、「みんな元気な私達」「仲よしの歌」「伸びるよ若芽」などのように、次代を担う子ども達に寄せる期待感が窺われる。例えば、「伸びるよ若芽」の曲に見られる、「両手さし上げ木の若芽 高い青空つかもうと 力いっぱい背伸びした」「東の海から朝の日は さっと日本を輝かす」或いは、「そうだ若芽だぼくたちも みんな元気で手をとって 楽しいお国をつくろうよ」というような歌詞には、終戦直後の混沌とした世の中の、一刻も早い復興を願う気持ち込み込められており、メッセージ性の高い歌詞になっている。戦前とはまた異なる意味で、終戦直後の

表4) 仙台中央放送曲撰定『とうほうたのほん』(仙台中央放送局放送部発行)

| 巻                             | 発行年月日        | 定価        | 曲名  | 作詞者  | 作曲者  | 備考  |
|-------------------------------|--------------|-----------|---|--|--|---|
| 1<br><br>(10曲)                | S. 22. 7. 10 | 不鮮明       | みんな元気な私達<br>おくれ雁<br>空地のお月さん<br>ワンガマハシ<br>仲よしの歌<br>餅花<br>伸びるよ若芽<br>つぎつぎ草<br>ムラノコ<br>育てる役目は私たち                              | 宮澤孝子<br>刈田仁<br>スズキヘキ<br>スズキヘキ<br>澤渡吉彦<br>小名木滋<br>草薙辰雄<br>錫木碧<br>濱田廣介<br>高橋恒男   | 福井文彦<br>海鋒義美<br>佐藤長助<br>佐藤長助<br>海鋒義美<br>海鋒義美<br>福井文彦<br>佐藤長助<br>佐藤長助<br>海鋒義美   | 表紙の表記は「ワンガマワシ」<br><br>餅花の習慣についての説明あり<br><br>新憲法施行記念童謡   |
| 2<br><br>(10曲)                | 不詳           | 不詳        | どんと祭<br>春のあしおと<br>かしぶえ<br>とりいれ<br>秋の丘<br>紅がらとんぼ<br>かっこう<br>たなばたまつり<br>胡桃<br>ちかみち  | 富田博<br>富田博<br>草薙辰雄<br>巽聖歌<br>草刈亀一郎<br>藤代耕<br>春日こうぢ<br>小名木滋<br>浜田広介<br>片平庸人   | 福井文彦<br>海鋒義美<br>福井文彦<br>佐藤長助<br>露木次男<br>海鋒義美<br>弘田龍太郎<br>弘田龍太郎<br>佐藤長助<br>海沼実  | 表紙の表記は「どんとまつり」<br>表紙の表記は「はるの足おと」<br><br>表紙の表記は「とり入れ」<br>作曲者名の下に昭22.7.28とあり<br><br>表紙の表記は「くるみ」 |
| 3<br><br>(10曲)                | 不詳           | 不詳        | 春三月は<br>追羽根<br>ねんねんころりん<br>こけし木ぼこ<br>はたおり虫<br>だあれもゐない<br>栗駒山<br>ぼたん雪<br>あられ降る夜<br>雪むろ                                     | 草刈亀一郎<br>草刈亀一郎<br>額賀誠志<br>斎藤まさし<br>春日紅路<br>高橋恒男<br>梶形喜夫<br>梶形喜夫(ママ)<br>小関繁<br>草薙辰雄   | 安倍盛<br>安倍盛<br>草川信<br>海鋒義美<br>海鋒義美<br>浦崎永口<br>福井文彦<br>福井文彦<br>佐々木すぐる<br>佐々木すぐる  | 表紙の表記は「だあれも居ない」<br>童唄 武田忠一郎採譜 わらべうた挿入<br>童唄 武田忠一郎採譜 わらべうた挿入                                   |
| 4<br><br>(10曲)                | 不詳           | 不詳<br>40円 | 春はどこから<br>筆の花<br>たにし<br>小馬の鈴<br>たのしいスポーツ<br>さくらんぼ<br>朝露小露<br>港の朝<br>ほたる<br>夜のお使い  | 草薙辰雄<br>額賀誠志<br>額賀誠志<br>額賀誠志<br>草薙辰雄<br>澤渡吉彦<br>草刈亀一郎<br>春日こうじ<br>小林直明<br>春日こうじ  | 海鋒義美(ママ)<br>草川信<br>草川信<br>佐藤長助<br>森義八郎<br>森義八郎<br>細谷一郎<br>長谷川堅二<br>海鋒義美(ママ)<br>長谷川堅二   | 目次の表記は「筆のはな」  |
| 5<br><br>(15曲)<br>写譜:<br>海鋒義美 | 不詳           | 70円       | 春のふで<br>野火<br>せみとり<br>水すまし<br>山のトラック<br>りんりん鈴虫<br>二十の扉<br>どこの子誰の子<br>栗の實<br>お月夜<br>雪を呼ぶ<br>雪の歌<br>ホーホー鳥追い<br>雪と雀<br>丘のけやき | 斎藤まさし<br>春日こうじ<br>三浦茂雄<br>春日こうじ<br>三浦茂雄<br>青木新八<br>澤渡吉彦<br>高山敏章<br>春日こうじ<br>春日こうじ<br>斎藤まさし<br>草薙辰雄<br>草薙辰雄<br>渡邊波光<br>渡邊波光 | 長妻完至<br>長妻完至<br>海鋒義美(ママ)<br>安倍盛<br>安倍盛<br>海鋒義美(ママ)<br>海鋒義美(ママ)<br>佐藤長助<br>佐藤長助<br>千葉了道<br>露木次男<br>安倍盛<br>安倍盛<br>海鋒義美(ママ)<br>海鋒義美(ママ) | 表紙の表記は「春の筆」<br><br>表紙の表記は「蟬とり」<br><br>表紙の表記は「ホーホー鳥追ひ」   |

この時期の、教育的な内容を含んだ歌詞の在り方が垣間見られる。

一方、戦前の「仙台児童倶楽部」から受け継がれていた東北という土地に根ざした文化の創造という趣旨は、この『とうほくうたのほん』の中にも連綿と流れており、そこから生まれた歌には、東北の自然を詠ったもの、或いは、雪の中での生活を詠ったものが多く見られる。さらには、「春のあしおと」「春三月は」「春はどこから」など、厳しい冬の生活の中で春を待つ気持ちを詠った歌詞を持つ曲も多いが、これらにも、東北独特の春への憧れの気持ちに寄せて、東北の復興への思いが象徴的に表現されているように思われる。

「東北うたの本」の曲作りが開始された1946（昭和21）年春頃の教育界は、

教科書はヨミカタ、エノホン、テホン、ウタノホン、カズノホンの五冊だが、これも民主的に再編成したため製本が遅れ文部省では四月初めまでには各校へ送ると言っているが、まだ何の音沙汰もない<sup>16)</sup>。というような状況であった。このように、教科書などの教材も未整備のままに学校教育を受けざるを得なかった当時の子どもたちにとって、自分達を取り巻く自然や、日頃の遊びを詠った歌詞の新しい歌を、ラジオを通して聴くことは、大きな楽しみであり、同時に、新鮮な体験であったことは想像に難くない。

## 6. 戦後の東北における愛唱歌としての 「東北うたの本」

このようにして開始されたラジオ音楽番組「東北うたの本」が、東北の子ども達に及ぼした影響を見ると、この番組のそもそもの趣旨が、歌作りの活動にきちんと反映されていた様子が見て取られる。その代表的な楽曲として、「おくれ雁」の事例を考察してみよう。

富田博はこの曲が作曲された経緯について下記のように記している。

そのころ（注：戦後、「東北うたの本」の歌作りが始まった頃）は先生はもう童謡づくりはとうに卒業されて、抒情詩、新民謡、それに生まれ変わった各学校の校歌づくりなどに精力的に御活躍でしたので、先生は旧作の中から「おくれ雁」の童謡一篇を御提供になりました。これに海鋒義美先生が曲をつけられたのです<sup>17)</sup>。

つまり、刈田仁は旧作の中からこの歌作りの活動のために、次のような一つの童謡詩を提供したのである。

### おくれ雁

- 一 南部の空で はぐれた雁か  
おくれ雁一羽  
あれあれかへる夕焼け空を  
鳴き鳴きかへる

- 北上土手の 春待つ子供  
わんがをやめて  
おくれ雁 見てた  
おくれ雁 見てた 見てた  
二 淋しいな、雁よ みんなで送ろ  
わんがわんが 廻せ  
廻して送ろ シロも<sup>(ママ)</sup> ポチも送れ  
一しょに送ろ  
わんがは走る音して走る  
光って走る  
シロもないて走る  
シロもないて 走る、走る  
三 おくれ雁一羽 遠くになった  
わんがの音よ  
子供のかげよ 柳の土手の  
夕焼空よ  
北上川の 瀬の瀬の水に  
春はまだ遠い  
まだまだ遠い  
まだまだ遠い 遠い<sup>18)</sup>

この詩に海鋒が曲をつけて発表した「おくれ雁」を、富田は、

東北の子どもの春をまつ心を歌ったこの歌は戦後の廃虚の中から新しい光りを待つ人人の心に悲しいまでに響き透りました。正に東北の児童文化の新しい夜あけの歌であり、今なお広く歌いつがれている名詩、名曲であります<sup>19)</sup>。

このように、「東北の児童文化の新しい夜あけの歌」と位置づけて高く評価している。

実はこの「おくれ雁」を巡っては、ラジオから流れてきたこの歌にまつわる思い出を現在もなお、強く抱いている人々が多くいるようである。例えば、2002（平成14）年3月の『河北新報』には、「教え子と結ぶ童謡おくれ雁」というタイトルで、

当時、北上川のほとりにある小学校に勤めていた私は、この歌詞に魅せられた。「南部の空ではぐれた雁か…夕焼空を鳴き鳴きかへる 北上土手の春待つ子供 わんがをやめて おくれ雁見てた」まさにこの地方の原風景だ。楽譜は読めず、オルガンも弾けない欠陥教師は、夢中で子どもたちと唱和した。以来、学校、担任が代わるたび、校庭の片隅や河原などで子どもたちと歌い続けた。今でも教え子からこの曲を求められている。数年前、教え子たちの還暦祝いの同窓会に招かれた。お開きの後、期せずして全員でこの「おくれ雁」が歌われた。今もこの曲で教え子たちと心が深く結ばれていることに、幸せを感じている<sup>20)</sup>。

このような、「おくれ雁」を子どもに教えた教師の思い出が投稿されたが、これに呼応し、1ヶ月ほどの



間に、次々と「おくれ雁」にまつわる思い出の投書が紹介されている<sup>21) 22) 23)</sup>。これらの投書からは、戦後復興期の東北において、「東北うたの本」から流れてきた一つの歌が、子どもにとっても、また教師にとってもいかに共感を呼ぶものであり、愛唱歌として繰り返し歌われていたのか、そしてその歌がいかに強く同じ時代を過ごした者を結びつけているかが読み取られる。まさに、大正期に天江富弥とスズキヘキが「おてんとさん社」を結成した時に掲げた郷土の童謡を作るという趣旨、そしてそれを継続した「東北うたの本」の活動の中で、東北の子どものための新しい児童文化を作るという趣旨が、具現化されていたということであろう。

### 7. 音楽科教科書に載せられた「東北うたの本」

「東北うたの本」の活動はこれまで考察してきたように単に、東北地方の子どものための新しい歌作りという活動にとどまらず、実は、戦後の学校音楽教育にとって、多大な貢献をしてきたことが明らかである。即ち、このラジオ番組を通して発表された子どもの歌の何曲かが、教科書に掲載されることによって、全国的な教材として学校音楽教育で扱われていたのであった。

これまでの調査の結果、海鋒義美作曲の「春の足もと」「仲よしの歌」そして「こぶしの花」が、教科書に採り上げられていたことが明らかとなった。表5)はこれら3曲の掲載教科書の一覧であるが、表に見るように、この3曲は教育出版株式会社と音楽教育図書

株式会社の二社の教科書に載せられていた。掲載された出版社は限定されていたものの、各曲とも10年から20年という期間にわたって教科書教材として採用されていたことから、「東北うたの本」のこれらの3曲は、東北の子どもばかりでなく、全国的な規模で、この期間を小学生として過ごした子ども達にも、愛唱歌に近い存在の歌を提供していたことになる。

### 8. おわりに：

#### 戦後の学校音楽教育における「東北うたの本」の意義

以上に考察して来たように、ラジオ番組「東北うたの本」における戦後の新しい子どもの歌を作る活動は、拠点とした東北のみならず、1950年代（昭和20年代後半）から1970年代（昭和40年代後半）にかけての教科書教材を提供したことを通して、全国的なレベルでの音楽科教育に大きな足跡を残したことになる。終戦後、それまでの教材の見直しが行われ、新たに教材を作り直していく過程において、こうしたラジオ番組を通して聴衆の支持を得ていた曲を採用していくことは、教材編成の一つの方策であった。とりわけ、長く仙台市音楽指導員をつとめ、後に全国音楽科指導主事協会理事にもなっていく海鋒義美が中心となって関わった「東北うたの本」の各曲は、戦後の音楽教育復興期の教材として、採用に値するものであったと考えられる。

最後に、このような教材面での「東北うたの本」が音楽教育に及ぼした影響の他に、ラジオ番組「東北うたの本」が戦後の学校音楽の歌声作りにもたらした意

表5) 戦後の音楽科教科書にみる「東北うたの本」掲載曲

|  |
|--|
| <p>「春のあしもと」 富田博作詞・海鋒義美作曲（表記は「春の足音」も有り）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆教育出版株式会社 「小学生の音楽 6」（昭和27年度用）／「小学生の音楽 6 改訂版」（昭和28年度用）</li> <li>「標準小学生の音楽 6」（昭和30年度用）／「標準小学生の音楽 5」（昭和36年度用）</li> </ul> <p>昭和30年度用の指導書には、「II指導要領」として以下の3点が挙げられている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a 早春の情景を歌ったこの歌をうたわせて、自然に親しむ心を喚起し、優雅な情を養う。</li> <li>b イ長調の階名視唱に習熟させ、さらに暗唱の力を伸張する。</li> <li>c 「歌い方」をくふうさせ指導する。</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆音楽教育図書株式会社 「統合版楽しい音楽 6」（昭和36年度用）</li> </ul>  |
| <p>「なかよしの歌」 沢渡吉彦作詞・海鋒義美作曲（「演奏会用」と表記された年度も有り）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆教育出版株式会社 「標準小学生の音楽 5」（昭和30年度用）／「総合小学生の音楽 5」（昭和34年度用）</li> <li>「標準音楽 新版 5」（昭和40年度用）／「標準音楽 新訂 5」（昭和43年度用）</li> <li>「音楽 新版 5」（昭和52年度用）</li> </ul> <p>昭和30年度用の指導書には、「II指導要領」として以下の諸点が挙げられている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a 「なかよしの歌」を歌わせて、友愛の精神を養い無邪気な童心をつちかう。</li> <li>b 明かるい(ママ) 曲想にあった発想唱法を訓練する。</li> <li>c 三度のハーモニーの美しさを味わわせる。</li> <li>d 4拍子の拍子記号につき理解を得させる。</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆音楽教育図書株式会社 「統合版楽しい音楽 5」（昭和36年度用）</li> </ul> |
| <p>「こぶしの花」 藪田義雄作詞・海鋒義美作曲</p> <p>曲名は「行進の歌」→「6年生マーチ（こぶしの花）」と変更</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆教育出版株式会社 「標準小学生の音楽 6」（昭和36年度用）／「標準音楽 新版 6」（昭和40年度用）</li> <li>「標準音楽 新訂 6」（昭和43年度用）／「音楽 新版 6年」（昭和52年度）</li> </ul>   |

（いずれも財団法人教科書センター附属教科書図書館所蔵教科書の調査による。また使用年度も同館所蔵目録による。）

味という観点から考察を加えておきたい。

先述の曾我道雄氏が在職していた仙台市立南材木町小学校は、1952（昭和27）年から文部省研究指定校として頭声発声の研究を推進した小学校であるが、そこで曾我氏と同時期に在職し、この研究にも深く関わった朴沢あきは、ラジオ放送番組の「歌のかばん」に触れて、

そこで私はこの時間には、ラジオの歌をよく聞かせること、歌というよりは声をきかせたいと思うのである<sup>24)</sup>。

と述べている。即ち、朴沢は、「歌のかばん」を歌を覚えさせることにではなく、声の指導に利用しようとしていたと考えられる。朴沢はつづけて、

児童の歌は指導者にもよるではあろうが、素直な無理のない本当に子供らしい発声の歌をきかせ、それをまねさせる事によって向上することが普通ではないかと思う。このようなことは常々の授業に於ては中々適当な機会を見出す事は困難である。私はそれでこの放送を利用したいと思うのである。こう伝った点からラジオの範唱は今日の様に年齢的にも歌唱の演奏技巧にも余り開きのない児童の歌が効果的である。自分達と大して違わないがどこか上手な所がある。よし私も歌ってみようという意欲をそそり、それをまねて歌っている中にその発声なり発音なり、リズム感なりが自分のものとして消化されて、児童の歌が向上していくのではないかと思われるのである<sup>25)</sup>。

と述べている。朴沢のこのような考え方が、『放送教育』という雑誌を通じて全国の教育界に読まれていったことには実は、大変大きな意味があると考えられる。朴沢がこの意見を述べた前年、即ち、1949（昭和24）年には、仙台市立南材木町小学校は全国唱歌ラジオコンクールで最優秀校になっているばかりでなく、この後には同校と仙台市立連坊小路小学校が交替に最優秀校に選出される時代が続き、おそらくその成績によって文部省も頭声発声の研究を仙台市内小学校に、具体的には南材木町小学校に委託したと考えられる。つまり、ここでの研究成果の報告書とその歌声を収めたレコードが公にされることによって、戦後の学校音楽教育の発声に関する一つのモデルが示されることになったのである<sup>26)</sup>。

「東北うたの本」の活動との関連でこのことを考えると、仙台放送児童合唱団には上記の両校から推薦された児童もたくさん在籍していた筈であるし、そもそも第2項において考察したような戦前から高い評価を得ていた仙台市内の小学校の合唱は、近隣の小学校においても歌声作りのモデルと見なされていたと思われる。もっとも、ラジオ放送開始当初から、「コドモ音楽講座 唱歌の唱ひ方<sup>27)</sup>」といった発声指導も含めた音楽番組が編成され、聴取者からも、

今日は僕の特選童謡「かげぼうし」のおけいこの日です。四家文子先生の美しいお声がラジオから流れ出ました。私はお姉様や妹の昌子と一生懸命になっておけいこしました<sup>28)</sup>。

というように、ラジオから流れる声楽家の歌声に合わせて一生懸命に歌の稽古に励んでいる旨の投書も寄せられていた。このように単に歌のレパートリーを増やすということに留まらず、ラジオから流れてくる歌声を真似させて発声の指導を行うということは、戦後も依然として続いていたようであり、ラジオの声を発声の指導に用いることの有効性については、「頭声発声の研究」が始まった1952（昭和27）年の時点で朴沢も、歌唱器楽等五つの部門の学習の中で「ラジオ」で最も効果をあげ得るのはどの部門であろうか、と考えてくると、私は「鑑賞」に力を入れたい。例えば歌唱では歌の指導或は読譜の指導などという事よりも児童にラジオの発声をきかせたいと思うのである<sup>29)</sup>。

と述べていた。従って、録音が可能になると、「東北うたの本」の曲を歌う仙台放送児童合唱団の歌声も、当然、歌唱指導時に利用されるようになったと推察される。さらに言えば、同じ教室で勉強している仲間の声が放送を通して流れてくるという意味でも、「東北うたの本」のラジオ番組は、子ども達にとって歌い方や発声のモデルとして、より捉えられやすかったと推察される。そしてこのことが、仙台地域における小学校の歌唱のレベル自体をさらに上げることに繋がっていったと考えられる。

このように、「東北うたの本」と仙台放送児童合唱団の活動を大きな視点で捉え直してみると、大正期に起った東北の子どものための文化創造の活動が、実は、戦後の日本における音楽教育の進む道筋を付けたといっても過言ではなかろう。「東北うたの本」の活動は、仙台に華開いた一つの児童文化活動でありながら、実は今日に至る我が国の音楽教育に大きな足跡を残した活動であったと言える。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたって曾我道雄先生からは、貴重な資料をお見せいただくと共に、たくさんのご教示をいただきました。元仙台放送児童合唱団のメンバーの方々のお話は、文献資料によっては得難い当時の活動の詳細を物語ってくれるものでした。先生やメンバーの方々の「東北うたの本」に寄せる熱い思いが、この研究の推進にどれだけの力を貸してくれたか分かりません。ここに記して心よりお礼を申し上げます。また、曾我先生との出会いの場を提供して本研究のきっかけを作って下さいました仙台市立南材木町小学校の大槻博先生と佐藤洋先生にも深く感謝申し上げます。

付記

本研究は科学研究費補助金による「洋楽導入期から現在に至る異文化適応の歴史的体系的研究 ―日本人の身体と音感の変遷―」（課題番号：15330190）の研究結果の一部を公表するものである。「東北うたの本」の表記については、ラジオ番組にも「東北うたの本」と「東北うたのほん」の両方の表記が見られる。また曲集は第1巻の『東北童謡集』を除いて他の4巻にはひらがな表記の「とうほくうたのほん」とローマ字表記が併用されている。本研究においては、HKジュニアコーラス0.G会がプログラムで使用している「東北うたの本」という表記を標準として使用した。なお、本文中の註がない引用はすべて曾我道雄氏から筆者への書簡、もしくは元仙台放送児童合唱団のメンバーの記述によるものである。

註

- 1) 「ごあいさつ」HKジュニアコーラス0.G会第18回定期演奏会(2004(平成16)年10月9日)プログラムより
- 2) 天江富弥：明治32年仙台市八幡町生まれ～昭和59年没 本名は天江富蔵 「郷土童謡」を提唱。  
スズキヘキ：明治32年仙台市北目町生まれ～昭和48年没 本名は鈴木栄吉 他のペンネームとして「スズキ・ヘキ」「錫木碧」の表記もある。「原始童謡」を提唱。  
刈田仁：明治34年仙台生まれ。大正11年、スズキヘキ、天江富弥の童謡誌『おてんとさん』の同人となり、童・民謡の創作に精進した。  
大正9年12月 ヘキ・富弥らによる第一回童謡研究会開催。  
大正10年2月 「おてんとさん社」創立。協力者として野口雨情、山村暮鳥、竹久夢二、三木露風らも参加。  
大正10年3月 童謡専門誌『おてんとさん』創刊(通巻7号で休刊)。  
(遠藤実『仙台児童文化史』久山社 1996(平成8)年4月及び「刈田仁 詩歴」おてんとさんの会編集発行『刈田仁詩選 おくれ雁』1973(昭和48)年5月より作成)
- 3) 遠藤実『仙台児童文化史』久山社 1996(平成8)年4月 p.25
- 4) 「仙台児童文化史年表」(同上書)
- 5) 「刈田仁 詩歴」おてんとさんの会編集発行『刈田仁詩選 おくれ雁』1973(昭和48)年5月 p.114
- 6) 遠藤実『仙台児童文化史』久山社 1996(平成8)年4月 p.58
- 7) 昭和21年3月13日 仙台児童クラブ復活の準備会即日発足。21日「第一回童謡童謡会」をひらく、なお正式名称・会則は4月26日皎林寺での協議会で決定した。  
(炉蓋春秋編集委員会編『天江富彌 炉蓋春秋』おんちゃん友達会発行 1985(昭和60)年6月)
- 8) 「あとがき」富田博『富田博作詩 童謡曲譜集 春の足おと』おてんとさんの会発行 1990(平成2)年5月 p.94
- 9) 同上
- 10) 富田博『おくれ雁』の親雁、刈田仁さん』『おてんとさん』通算第14号 2003(平成15)年6月15日
- 11) 海鋒義美：明治38年山形生まれ、山形師範卒後教職にあること二年で上野音楽学校付設臨時教員養成所に入り九州熊本市の女学校に音楽教諭として赴任、昭和八年仙台市音楽指導員として来県した、自來今日まで二十年にわたり本県の学校音楽教育のため誠意をもって指導、その成果は年を経る毎に実を結んで今や仙台は日本随一の学校音楽都市として自他共に許すようになった(中略)現在全国音楽科指導主事協会理事をつとめるほか宮城県教育音楽研究会参与で本社と共催の“作曲コンクール”は全国唯一の進歩的な企てとして注目的となっている同氏の深奥な音楽理論、卓越した技量、みがかれた人格は常に教育関係者の敬慕的であり、宮城県のみならず東北六県音楽教育のためにかけがえのない人物となっている。  
(「河北文化賞に輝く人々」『河北新報』第19823号 1952(昭和27)年1月1日(火) 第6面)
- 12) 昭和8年に当時の仙台的谷市長の要請で、仙台市音楽指導員として着任されました。仙台市の小学校を中心に巡回して、音楽の

- 授業を参観され、指導助言にあたりられたり、その学校の合唱団を直接指導されたりという、現在の市の指導主事のような役割を担って、仙台市の音楽教育の振興に尽力しておられました。昭和15年に、仙台市立仙台中学校(現在仙台高等学校)が開校されると、教員として音楽の指導を担当し、(中略)戦後昭和22年の学制改革後は、仙台高等学校の教諭として音楽教育に専念されると共に、仙台市音楽指導員として、また24年からは宮城県の視学委員として、小・中・高の音楽教育の向上に尽力されました。(曾我道雄氏から筆者への書簡による)
- 13) 「福井文彦氏略歴」  
仙台出身、明治42年生れ、昭和8年国立音楽学校本科ピアノ科卒、ピアノを高折宮次、パウエル、ショルツ両氏に、作曲を諸井三郎氏に師事、昭和8年より18年まで藤原義江氏の専属伴奏者となり14年世界一周演奏旅行に赴いた「興亜行進曲」に当選総理大臣賞を受け、現在仙台中央放送局囀託合唱団の指揮者である。  
(『河北新報』第17710号 1946(昭和21)年3月4日(月) 第2面)
  - 14) 「ラジオ」『河北新報』第17679号 1946(昭和21)年2月1日(金) 第2面
  - 15) ◇9：45 唱歌と童謡 仙台放送児童合唱団(曲名なし)  
(「ラジオ」『河北新報』第17687号 1946(昭和21)年2月10日(日) 第2面)  
◇5：30 歌のけいこ 仙台放送児童合唱団(曲名なし)  
(「ラジオ」『河北新報』第17700号 1946(昭和21)年2月22日(金) 第2面)
  - 16) 『「ホン」も間に合いません 『一ネンセイ』にさびしい春』『河北新報』第17733号 1946(昭和21)年3月28日(木) 第2面
  - 17) 富田博『おくれ雁』の親雁、刈田仁さん』『おてんとさん』通算第14号 2003(平成15)年6月15日
  - 18) おてんとさんの会編集発行『刈田仁詩選 おくれ雁』1973(昭和48)年5月 pp.4-5
  - 19) 17)に同じ
  - 20) 「教え子と結ぶ童謡おくれ雁」水沼静弥 77無職(宮城県米山町)(「声の交差点」『河北新報』第37924号 2002(平成14)年3月29日(金) 第5面)
  - 21) 「義姉三回忌に最高の贈り物」森屋芳徳 65無職(宮城県瀬峰町)二歳上の妻の姉は、教材もままならなかった勉強の中で、担任だった水沼先生から教わった「おくれ雁」をよく口ずさんでいたという。  
(「声の交差点」『河北新報』第37939号 2002(平成14)年4月13日(土) 第5面)
  - 22) 『おくれ雁』で頭よぎる風景」狩野ゆき子 63主婦(宮城県富谷町)本欄の「教え子と結ぶ童謡おくれ雁(がり)」を読んで懐かしく、感動しました。この歌は、昔のことを思い出したときに、フツと頭をよぎることがあります。(中略)三年前、孫の小学校の運動会の父母競技で「わんが回わし」がありました。(中略)そのときも、こんな歌があったっけなあーと思いました。あの歌の情景が、自分の子どものころとオーバーラップして脳裏に刻まれているのかもしれない。  
(「声の交差点」『河北新報』第37931号 2002(平成14)年4月5(金) 第5面)
  - 23) 「教え子の幸せ55年ぶり確認」水沼静弥 77無職(宮城県米山町)昭和21年に宮城県東和町(当時米山町)のM小学校の六年生を担任した時の教え子から突然の電話があった。(中略)本欄に載った私の「教え子と結ぶ童謡『おくれ雁(がり)』」を彼がたまたま読み、矢も盾(ママ)もたまらず電話番号を調べたそうだ。四カ月間の小学校生活で心に残っていることを聞いたら、彼は「学芸会でみんなと一緒に『おくれ雁』を歌ったことです」と言う。私は胸がジーンと熱くなった。本欄がきっかけで五十五年ぶりに教え子と巡り合えた幸せに感謝している。  
(「声の交差点」『河北新報』第37956号 2002(平成14)年4月30日(火) 第5面)
  - 24) 朴沢あき「リポート 聴取指導の一時間 ―歌のかばん―」『放送教育』第5巻第8号 1950(昭和25)年11月
  - 25) 同上
  - 26) 文部省『初等教育研究資料 第XIV集 音楽科実験学校の研究報告(2)』教育出版株式会社 1956(昭和31)年7月および付属のEP盤レコード参照。
  - 27) 秋山正美編『ラジオが語る子どもたちの昭和史 III』大空社 1992(平成4)年3月 p.3
  - 28) 上田實「私の童謡のおけいこを聴いて」秋山正美編『ラジオが語る子どもたちの昭和史 III』大空社 1992(平成4)年3月 p.234
  - 29) 朴沢あき「私は三学期の学校放送音楽番組をこのように利用したい」『放送教育』第6巻第11号 1952(昭和27)年2月